

## 彩の国さいたま芸術劇場×クリストファー・グリーン(英国) 『THE HOME オンライン版』第3回報告書 〈成果発表〉

太下義之

### 1. 成果発表段階の概要

#### (1) 作品概要

オリジナルの『THE HOME』は、30人の観客が架空の、しかし建物としては実在する高齢者施設に週末の48時間にわたり滞在するという、クリストファー・グリーンによる没入型の演劇作品(イマーシブ・シアター)で、2019年秋に英国で2回上演された。

本プロジェクトは、この『THE HOME』のオンライン版(動画視聴、アプリ体験)を英国と日本で新たに制作しようというもの。日本版では、観客は架空の高齢者施設「あおぞら」でのバーチャル見学を体験することになる。劇中に登場する高齢者をさいたまゴールド・シアターの練達の役者たちが演じており、映像作品ではあるが、リアルな老いと介護の世界を観客は垣間見ることができ。

バーチャル施設見学のウェブサイトの公開期間は、2021年9月26日から12月31日まで。(https://www.thedigitalhome.org/)

#### (2) クレジットは以下の通り(敬称略)。

- ・原案・総合演出：クリストファー・グリーン
- ・日本版 作・演出・出演：菅原直樹(OiBokkeShi)
- ・出演(オンライン版)：阿部輝、鈴木真之介、佐藤螢、武田有史、石川佳代、大串三和子、小淵光世、滝澤多江、田村律子、林田恵子、百元夏繪、葛西弘、北澤雅章、高橋清、竹居正武、遠山陽一、森下竜一(以上、さいたまゴールド・シアター)
- ・森下田美子(ナレーション)、武田郁乃
- ・伊藤亜紗、孫大輔
- ・映像監督：遠山昇司
- ・撮影・編集：加藤信介
- ・デジタルプラットフォーム制作：Marmelo Digital
- ・企画・制作：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団
- ・主催：独立行政法人国際交流基金、公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団
- ・共同制作：独立行政法人国際交流基金、オールバニー劇場、エンテレキー・アーツ、クリストファー・グリーン、公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

### 2. 所見

世界で最も早く、しかも大規模な超高齢社会となった日本。そこには、簡単には解決できない課題が山積している。そのような背景のもと、架空の高齢者施設「あおぞら」でのバーチャル見学を通じて、観客は自身や家族の老後の生活や介護に関するイメージをつかむことができるようになるものと期待される。

現実の高齢者施設のように、架空の高齢者施設「あおぞら」においてもさまざまなスペースが用意されている。観客はそれぞれのスペースに足を運ぶ(ゲーム感覚でクリックして視聴する)という体験を通じて、日本の介護の現状と実態についても理解を深めることができる仕掛けとなっている。

ちなみに、ウェブサイトはかなりわかりにくい構成となっている。これは観客が、まるで施設内を訪ねて歩くような感覚をバーチャル世界で再現するため、わざと構成をわかりにくくしているのだと推測される。一方で、丸48時間

かけて現実の施設を体験するというイマーシブなオリジナル作品とは対照的に、本作品に関しては自宅や外出先の隙間時間などで体験した人が多かったのではないかと。そのように考えると、たとえば「クイックガイド」または「おすすめコース」のようなメニューがあっても良かったように思う。

一方で、リアルな演劇作品と比較すると、登場人物が観客に対して直接語りかけてくるような設定が多いので、あたかもその人と対話しているかのような感覚で、この架空の世界に観客が没入できるという特徴を指摘できる。

まず最初の「ウェルカム・メッセージ」において述べられている通り、日本では介護保険制度の枠組みの中で、「決められたことを決められた通りに」行うということが前提となっている。その結果、多くの高齢者施設では、入居者や利用者の健康には(過剰に)気を使うものの、一方で彼/彼女らの文化的な生活はあまり配慮されないのが現状である。しかし、高齢者施設で食事や入浴、運動等のメニューが提供されているだけでは不十分であろう。それだけでは、食事は栄養補給に、入浴は身体洗浄に成り下がってしまうことになる。高齢者が生き甲斐を感じて豊かな生活を過ごすことこそが重要なのだと思う。そのためにも、文化的な体験やその支援メニューの提供が今後は重要になってくると考える。

また、「入居者・田村さんに会う」において、入居者の田村さんは「家族がぐちゃぐちゃになるのが嫌だ」という理由でこの施設に入居したと語っている。これは現実の問題でもある。たとえば、「みんなの介護」というウェブサイトを見ると、親の介護で家族仲(兄弟仲)が悪くなった経験がある人は9割以上(91.5%)というアンケート調査の結果となっている<sup>1</sup>。こうした現実を踏まえると今後は、経済的な課題が解消できる場合には、高齢者施設に入居するというケースが増加していくことが予想される。

「入居者・小林さんに会う」においては、入居者の小林さんがお漏らしをしてしまうシーンが描かれている。そして、そのことで自分自身に対する怒りや不甲斐なさ、劣等感等の感情を抱いた小林さんが、介護者に対して八つ当たりしてしまい、最後には「殺してくれ」と懇願する姿が描かれている。ここで描かれているように、「高齢になる」ということは、今まで普通にできていたことが徐々にできなくなっていく過程でもある。そうした現実を受け止めることが、老いるためには必要なのだと実感させられる映像であった。逆に、こうした映像を見ると、普段の何気ない日常生活がとても大切なことに思えてくるのではないかと。

また、「ワークショップを見学する」においては、入居者と介護士が密なコミュニケーションを取っている姿が印象的であった。現実の高齢者施設においても、このようなワークショップが実践され、入居者の意見をしっかりとヒアリングしていると良いのであるが、また、同ワークショップでは、地域住民が入居者の生活を手助けしているというシーンも描かれていた。現実の社会においては、責任問題等の障壁があると考えられるが、こうした地域とのつながりができること自体は素晴らしいことだと感じた。

さらに本作品においては、コロナ禍によって施設に入居する高齢者たちの生活が大きな影響を受けている様子も描かれている。コロナ禍のため、家族との物理的な面会が制限されているのである。こうした中、「オンライン面会の様子を見る」においては、父親(入居者)に対して、テレビ電話(リモート)を通じて、娘は母親(父親にとっては妻)が昨日死んだことを伝えようとするが、認知症が進行した父親はそもそも対話の相手が自分の娘であることを認識できない、というとても印象的な場面がある。こうした場面は現実の高齢者施設において頻発しているものと推測される。コロナ禍のせいで家族との面会が制限された高齢者の中には、認知症が急速に進行した人が多いのではないかと。おそらく、コロナ禍がおさまって、家族が久しぶりに高齢の入居者に再会した時に、この実態が明らかになると思われる。

一方で、こうしたコミュニケーションの障壁は、実は健常者同士のコミュニケーションにおいて日常的に生じていることにも気づく。具体的には、価値観の異なる相手との対話においては、こうしたコミュニケーション不全が十分に起こり得る。高齢とは、こうした現実の課題をより拡大していく過程なの

かもしれない。この点は別途収録されている、鳥山大二郎先生による「対話」についてのレクチャーのテーマともなっている。劇中に「実際の現場で起こっているのは、教師と生徒のお互いの学び」というフレーズがあったが、理想的に言うならば、こうした「相互の学び」が高齢者施設において実現できると素晴らしいと感じた。

一方で、英国版の方は日本版とはかなり異なるテイストの作品となっている。英国の『THE HOME』は国内で32か所もの施設を運営する大企業という設定であり、たとえば、介護の現場で発生する問題に対しても、実に企業らしいやり方に対応している。また、英国版の方が現実の課題、たとえば介護職の人手不足や低い報酬等にストレートに切り込んでいる。そして、こうした映像を通じて、介護と資本主義の関係について、観客が考え直す契機を提供している。

また、日本版と英国版の両方を視聴することにより、日英の生活慣習や老いに対する向き合い方の違いも明らかになったように思う。たとえば、そもそも老後の生活イメージについて、英国では基本的に明るく描いているのに対して、日本版では全体的に暗いトーンとなっている。英国では高齢者施設における運動の積極的な推奨に象徴されるように、「アンチ・エイジング」、すなわち老いに抵抗するという思想が根底にあるように感じた。一方で日本においては、老いをそのまま受容するという文化があるのではないかと。

また、日本版では高齢者施設に専属の(高齢者の)運転手がいるのに対して、英国ではUberを利用して。現実の日本社会においても、今後はUberが普及していくことを予感させる。同様に、本作品はフィクションではあるものの、英国版では介護ロボットが導入されていた。一般的に日本では人間による介護こそがあるべき姿と考えられているように思うが、今後の日本の高齢者施設においても、介護ロボットの導入が議論されるようになるであろう。または、本作品で描かれたように、元気な高齢者が入居者を介護するという「老老介護」が、高齢者施設においてもより一般的になるのかもしれない。

なお、「THE HOME オンライン版〈バーチャル施設見学〉」という事業名称は、たしかに「公演情報」として彩の国さいたま芸術劇場のウェブサイトに掲載されているのだが、一見しただけでは何のことかわからないように思う。もしかしら、このタイトルを見て、これが新しいタイプの演劇作品だとは思わずに、そのままスルーしてしまった人も多いのではないかと。

<sup>1</sup> みんなの介護 https://www.minnanokaigo.com/enquete/no6/



映像作品より